

七代目を繼いだ

野澤吉兵衛

御靈神社の一隅に、靜かに一世界をなしてゐる文樂座にも、近來事が繁く、名人上手が段々と亡びゆく。近く人形の玉藏が逝いた。文樂王國にとつては多大な損失だ。いや文樂王國に限らぬ、この日本の藝界のためにどれだけの損失となつたかも知れぬが、それも命數だ。個人としては氣の毒だが藝壇のためには逝つた名人上手を徒らに追慕せんよりも、新しいものゝ簇出と若いものゝ上達こそ大切である。

ところで、この盆替りの興行(大正十五年九月)から、竹本土佐太夫の合三味線である野澤吉三郎が、その恩師野澤吉兵衛の名を襲うて、七代目をつぐことゝなつた。名などはどうでもいゝ藝の本質さへよければそれでいゝといふ事も通用する。當りまへすぎる程の理窟であるが、妙なもので名は實の賓で、藝から名が生れるのだが、古來の名人上手の名をついでから、めつきり腕が上達する場合もある。あるといふよりも「名」に責任を感じて、名人の名を汚すまいとする藝道の誠が、その人の腕を磨く砥石となつた場合が多い。

吉三郎が吉兵衛となつたのは、當り前すぎるほどの順序であるが、それでも當人は「名人吉兵衛」の名を繼ぐことを空恐しいものとして、辭退したのださうなが、太夫の土佐太夫も勧め、最眞筋からの勧告もあつて、いよ／＼吉兵衛を襲名した。元來「吉兵衛」の名は吉三郎、吉彌、吉兵衛といふ順序に進んで行く階段であるのが、吉彌をさしおいて吉三郎が、吉兵衛を襲名したといふのは、特殊な事情があつての事である。

この間死んだ六代目吉兵衛の重なる弟子としては八助と吉三郎とがある。この兩人は何れを兄とも弟とも言ひかねる腕であるが、八助は吉三郎よりも一月ほど早く吉兵衛の門に入つた兄弟子である。藝はといふと一長一短である。が、わたしの見るところでは、八助に天才の閃きがあるが、常住不斷の努力が缺けてゐる。吉三郎はどこまでも、堅實に型を追うて手堅い努力の人、修養の人である。八助に堪らぬほどの妙手があり、うまいと、思はず棧敷の手摺を拍たすことがあるが、腕の弱い時にはだらけるところもある。吉三郎には藝にこのムラがない。努力のひた押で叩き上げ、築き上げたところの腕の強さは、八助の遠く及ぶところでない。が、撥のよく廻る器用さは八助にあつて、吉三郎に缺けるところだ。この一長一短の、何れを何れと批判し難い二人の弟子を持つた故吉兵衛は、吉兵衛の名を、その一人に繼がさうには、迷つたことであらう。ところへ八助が「吉彌」の名を乞ひ望んだのであるから、吉

兵衛は八助に吉彌を與へ、その當時既に吉三郎であつた吉三郎に、七代目吉兵衛を與へることを二人の兄弟弟子に約束したのである。

で、控紋下——即ち庵の太夫である土佐太夫を弾いてゐる以上、吉三郎も紋下格の吉兵衛の名を繼ぐに何の不思議もなく、この盆替りから七代目吉兵衛となつて、中幕の「堀川」に墨の香新しい「野澤吉兵衛」と太夫付の三味線に、その名を番付に現はしたのである。で、吉三郎の新吉兵衛の藝壇における生立ちを今にして顧みると、新吉兵衛は明治十一年の生れ、今が油の乗りどころ。その子供の時には姉が地唄を稽古してゐるのを聞きながら三味線に引つけられて、幼いながら、何を捨てゝも糸の調べに我を忘れてゐた。こんな事が縁で十三歳といふ腕白盛りに、豊澤兵吉の弟子となつて兵市の名を貰ひ、彦六座へ通つた。

後先代の吉三郎即ち溝側の吉三郎といはれてゐた名人のところへ通ふやうになつて、師匠の吉三郎が死んだので、この間の吉兵衛が吉彌時代にその門に入つたのである。かくして兵市二十三歳の時に、師匠から市次郎の名を貰つた。

この市次郎といふ名は、なか／＼由緒深い名であるといふのは、野澤家では三代目の吉兵衛が中興の宗であり、且淨曲界全體としても、一時代を劃した劃期的の名人上手であつた。その三代目の幼名が市

次郎、勝鳳、吉兵衛と進んだ人であるから、市次郎はなか／＼の重い名とされてゐた。この市次郎を二十三歳にして貰つて初めて、當時の新靱太夫の「伊賀越」三段目の切「まんぢう娘」を勤めたのである。かくて二十五歳まで新靱の合三味線で二十六歳で伊達太夫——今の土佐太夫を弾く事となり、今日に及んでゐるが、二十七歳のときに堀江座が出来て、その柿葺落しの興行に伊達太夫の「本朝二十四孝」四段目の切を弾いたのである。

ところで新吉兵衛が、二十三歳にして既に市次郎の名を貰ひ、二十七歳にして四段目を弾くに至つたその出世藝は何であつたかといふと、いつも若い藝人の登龍門となつてゐる、人の代役をして名人「清水町」即ち團平師匠に、その技を認められたに端を發してゐる。

それは新吉兵衛がまだ十八の時であつた。稻荷座で「箱根靈驗記」が出た事があつた。この覽の仇討の「饌別」の立端場が新靱太夫で合三味線が廣作であつたのが、興行半ばで廣作が病んだ。どうにも代りの都合がつかなかつたので、まだ／＼この廣作の代りをする位置ではなかつたが、手のあいてゐるといふ偶然の事の爲めに、新吉兵衛——當時の兵市の頭上にこの大任が——或はこの出世の棧橋が見舞つたのであつた。若い兵市は懸命であつた。又すばらしい出来榮を見せた。清水町の師匠はこの兵市に囁望し、その藝の筋と、その努力を高く買つたのである。して稻荷の次興行に「菅原」の出た時に、團平

の口添で兵市は、一躍立端場の車場を弾いた。太夫はこの間死んだ聲の美しかった雛太夫であつた。この「饌別」と「車場」とを出世藝としてメキメキと兵市は名を揚げ腕を磨いたのであつた。そして代役の縁から伊達太夫を弾くまでの數年を新靱太夫の合三味線として終始したのである。

ところで、今度の新吉兵衛の襲名の披露に「堀川」が出てゐるが、この「堀川」は「吉兵衛」にとつては、なか／＼縁の深い淨るりである。——といふのは、「堀川」ばかりではないが、——吉兵衛六代中の傑物であつた三代目の吉兵衛が、時勢に添うて三味線の手を派手に／＼とつけかへた。劃期的に淨るり三味線の手を改善し、一新時代を劃したのだが、就中「堀川」を最も得意として、今見るが如き派手な「堀川」の三味線の手を創作した。——創作したといつてもい／＼くらゐに、從來の「堀川」から脱離して、新しい三味線を生んだのである。爾來「堀川」はこの三代目吉兵衛の型によつて、三味線は今聴くが如く弾かれてゐるのである。この「吉兵衛名」にとつても記念すべき作であるところから、新吉兵衛襲名披露狂言の選に「堀川」が選ばれたのだが、この三代目は「鬼吉兵衛」と呼ばれた程の名手で、近代の巨匠のあの五代目春太夫を弾き、攝津大掾を仕上げた名人である。そしてこの三代の父といふのが初代の越路太夫であつたから、自分の育て子の攝津大掾に、父の太夫名を名乗らした。この二重の縁故によつて文樂座にとつては、三代吉兵衛以來「吉兵衛名」は重い／＼名跡となつてゐる。

終りにこの由縁深き吉兵衛をついだ七代目を、心から祝福し、淨曲界のために、その「名」が、その人を得た事を慶んでおく。(大正十五年九月廿六日)